

氏名（本籍）^{フジエ} 藤江 てるみ（富山県）
 学位の種類 博士（美術）
 学位記番号 博美第83号
 学位授与年月日 平成12年3月24日
 学位論文等題目 <作品>『洛中洛外図屏風歴博甲本右隻第二扇』についてのオリジナル部分の現状模写及び欠損加筆部分の再現
 <論文>『洛中洛外図屏風歴博甲本右隻第二扇』についてのオリジナル部分の現状模写及び後補部分の再現

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	田 淵 俊 夫
（論文第1副査）	”	”	（ ” ）	北 田 正 弘
（作品第1副査）	”	助教授	（ ” ）	宮 廻 正 明
（副査）	”	教授	（ ” ）	長 澤 市 郎
（ ” ）	東京国立文化財研究所	所 長		渡 邊 明 義
（ ” ）	”	助教授	（美術学部）	田 口 榮 一
（ ” ）	半田九清堂			半 田 達 二

（論文内容の要旨）

紙や絹といった脆弱な素材の上に描かれた日本絵画は、周期的に修理が施されることにより今日に伝えられている。したがって、現在我々が目にすることが出来る作品は修理に値する芸術的価値の高いものであり、文化財として貴重な存在であるのは当然のことといえる。

伝世のなかで顔料の剝落、料紙・料絹の欠損は、その時の修理で手当されるだけでなく、加筆されることも多かった。明治時代以前の修理では、無原則に加筆や補修が行われていたと思われる。明治時代以降は、作品を文化財及び芸術作品と見なす価値観も成立し、文化財の保存に関わる法律も制定され、オリジナル部分を尊重し、作品上に手を加え本来の芸術性を損なうような修理は行わなくなっている。特に近年の日本絵画の分野においては、図像の回復は芸術性の回復に繋がらないという認識が確立しつつあり、その認識のうえで修理、特に欠損部の補修の方針が示されている。しかし、作品の中には過去の修理によって、鑑賞上に相当の影響を与えてしまうような補筆が組み込まれてしまったものが存在するが、その修理における取り扱い、除去する場合と除去しない場合との二様に分かれている。

本研究の対象作品である「洛中洛外図屏風歴博甲本（旧町田本）右隻第二扇」は、保存状態も良く、芸術作品としての価値だけではなく研究資料としても貴重な作品であるが、右隻第二扇には、縦34.5cm、横（上）39.7cm・（下）43.5cmの台形状に欠失があり、周囲のオリジナル部分とは一見して技法、表現、様式の異なる、後世の補筆が加えられている。平成9年の修理においては、その後補部分はそのままだに残された経緯を持っている。この経緯を踏まえ、このような後補

部分が作品に与える影響質量を考えるために、後補部分を再現することによって、後補によって損なわれてしまった芸術性をどのように回復し得るのかその可能性を確かめるために、この再現研究を試みることにした。

このような再現は実際の修理の現場において行うというものでも、また、オリジナル作品に置き換えるというものでもなく、あくまでも洛中洛外図屏風歴博甲本右隻第二扇に限った研究の一環として行うものである。自由な立場で研究を行えるという利点がある。しかしながら、図様と表現の再現が恣意的にならないこと、学術的批判に耐えるものではなくてはならないので、次のような方法と手順によって再現と研究を行うことにした。

まずオリジナル部分の現状模写を行う。この研究方法はオリジナル部分の表現の特徴を掴み、再現を行う上で欠かすことが出来ない。次に後補部分とオリジナル部分の調査・分析を行う。そして、後補部分の再現を行うが、オリジナル部分の調査結果や同時代に制作された類似作品 ①東京国立博物館所蔵 東博模本、②国立歴史民俗博物館所蔵 歴博乙本、③米沢市所蔵 上杉本の3作品を中心とした様々な資料を元に、建築・芸能・服飾・風俗・商業などのあらゆる点を考証し、画家としての制作や模写の経験を生かしながら検討を行い、より客観的に当初の姿に近い図柄の再現を試みる。そして、オリジナル部分の現状模写と共に、同画面上に合わせて作品として制作する。

細部についてもあらゆる角度から検討を行ったうえで導き出し完成した作品は、再現図の一つの作例として、学術的にも誤りの少ない作品といえるのではないだろうか。

後補部分の再現により、作品全体としての芸術性を回復できたかどうかという点について考察してみると、この作品の後補部分では、作品を鑑賞するうえでも、図柄の内容のうえでも悪影響を及ぼし、芸術性を低くしてしまうものであったが、仮に現在の後補部分に再現図を置き換えて両隻を並べ全体的に見た場合、以前の加筆部分よりも作品として見易くなったと思う。また、二度の熟覧を行い、二度目には実際に原本の横に並べて比較したうえでもその効果を確信した。それは再現図の内容が芸術的に価値が高いものということではなく、あくまでもオリジナル部分との自然な繋がりを考え、オリジナルの特徴に即して行い、研究対象の第二扇だけではなく両隻を通して、突出することの無い様に心がけてきた結果であると考えられる。

このような再現図を制作をしていく作業には、画家としての技術と感性が必要であるが、この技術と感性を頼りにしすぎると、綿密な調査を行うことなく再現図を作り出してしまいう危険性がある。本研究では、実際の修理の現場において行うものではなく、また、オリジナル作品に置き換えるというものでもなく、あくまでも研究の一環として自由な立場で行ってきたが、再現に際しては、オリジナル作品を尊重し客観的に行うということを念頭に置いておかなければ、本来の目的である芸術性の回復ということから離れてしまう。また、客観的に行おうとして、調査したデータに頼りすぎると、かえってそれを真実であるという誤解を与えてしまう危険性もある。また、この洛中洛外図屏風歴博甲本は、様々な分野において資料的価値の高い作品であり、多くの研究が進められている。本研究では画家としての目から研究対象作品を捕らえ、オリジナル部分の現状模写や後補部分の再現を行うといった実際の制作を伴う方法であったが、期待した以上の成果があげられたと確信をする。それは、文献上や通常の研究では得られない発見や、作品の特徴や表現を掴むというような表面上だけではなく内面的な方向から作品を捕らえ

られたということである。このような研究方法は芸術大学の特徴を活かすことが出来るものであり、我々のように作家として芸術活動を行う者が、文化財の保存・修復に対して担うべき役割について考えるきっかけにもなると考え、今後も続く文化財保存学科保存修復日本画研究の第一歩としても意味があるものであり、さらにこのような研究方法が活用されることを期待する。